秋田県立博物館研究報告第30号　57～70ページ　2005年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.30, 57-70, March 2005

名誉館長館話実施報告抄

新　野　直　吉*

千蒲　善五郎・寺崎　廣業・鈴木　空如・金子　洋文・後藤　逸女・小林　多喜二

はじめに

平成16年度は「先覚記念室」に関する館話をリニューアル直後の県立博物館で６回、「菅江真澄資料センター」に関する講話を昨年度と同じくジョイナスで６回行った。例によって５月14日（金）千蒲善五郎・５月28日（金）寺崎廣業・６月11日（金）鈴木空如・６月25日（金）金子洋文・７月９日（金）後藤逸女・７月23日（金）小林多喜二の館話を文章化して報告する。

千蒲　善五郎

秋田石油産業の先達として知られる千蒲善五郎は、文化14年（1817）10月10日、城下上通町で父の善五郎直明と中野氏の出である母ヌエの次男として誕生した。父は幼名を萬四郎といい、彼は幼名を倉吉といった。なお彼の名乗は直昌であった。

千蒲家は慶長19年（1614）千蒲を苗字として、佐竹氏の重臣梅津憲忠の臣となり、大坂冬の陣に出て手柄をたて200石を給された茶右衛門氏直を初代としている。茶右衛門は数奇な道を歩んだ人らしい。『千蒲氏家譜・年代記』（秋田文化出版社）によると、幼名小一郎、通称藤兵衛で文禄元年（1592）武蔵国千住の北、蒲生領に生まれ母の遺命で武道の志を達する為に出羽の神宮寺郷に居住して、大坂出陣の梅津氏の家来になったという。

数奇と表現したのは、これだけではなく、彼は名将蒲生氏郷の落胤だというのである。氏郷は近江守護六角（佐々木）氏の部下の日野城主蒲生賢秀の長男で、永禄11年（1568）父と共に織田信長に仕え、信長の娘冬姫を夫人とした。後豊臣秀吉に従い武功を挙げ氏郷と名乗り、天正18年（1590）小田原攻略の功で会津42万石を領し、翌年には90余万石に増大する。文禄元年（1592）秀郷は黒川の城下町名を若松と改めた。落胤のことなどあればその頃のことになろう。「永代記」には「天正の頃縁を求めて氏郷公の奥に仕（へ）しに、故有て懐胎となりしが、厚き命を蒙りて故郷へ帰り身を大切に暮しけるに、文禄元壬辰としの春、氏郷公は石田三成の密謀にて毒殺に逢給へ（ひ）て後、同年の夏に至て男子誕生す」とあるが、曽我氏だったという母は武蔵すなわち今の東京都の人で、千住に帰り小一郎を生んだという家伝なのであろう。但し蒲生氏郷の死は京都において文禄４年（1595）のことであるから、この赤子が、春に父の死んだ元年の夏に生まれたというのは、明治３年（1870）善五郎直昌が家伝を書くまでの二百数十年の間に、伝えが変化したのであろう。

ところで倉吉は数え年３歳の文政２年（1819）に38歳の母を失うという不幸に見舞われた。父の後妻に仙北郡花立村外山新四郎の娘が迎えられたが、それが倉吉何歳のことかは史料的に明らかでない。さらに彼の身の上に重大な出来事が起こった。文政７年８月４日に幼名を善蔵といった兄の直隆が15歳で逝去したのである。７歳年上の兄が亡くなったということは、彼が家の後継になったということになる。姉のフツという人がいたが、菅谷粂之助という養子と結婚して分家していたので、父直明の後継は彼しかいないのである。

そもそも氏直を初代として２代正直、３代直家、４代成直、５代直信と続くが、直信は享保７年（1722）に23歳で逝去し、同５年生まれの６代となる幼名粂八は母に伴われ母の実家菅谷家に同居した。さらに３代直家と４代成直とは主家の相続騒動に巻き込まれたらしく元文３年（1738）に主家を浪人した。直家は脇本の親族に身を寄せ手習師匠をし延享元年（1744）同所で死去し、成直は孫粂八が身を寄せる真崎氏家来の菅谷家で同居した。やがて寛保元年（1741）大町１丁目府屋七十郎の家を借り、武士を棄て苗字を千釜と改めて、荒物・煙草の商いを始めた。粂八は通称善五郎・

*秋田県立博物館

孫七郎で寛保元年では数え年で22歳になっており、名乗は直重である。６代直重は宝暦12年（1762）に壮年にして、上通町南側武田惣左衛門敷地の内表口３間奥行一杯の宅地を135貫文で買求め、一家で引越し荒物・煙草・油・蝋燭・穀物を商うことにした。寛政３年（1791）72歳で世を去った。商人としての千釜家はこの段階で成立したのであろう。祖父の４代成直は宝暦５年（1755）に76歳で大町で逝去していた。

７代善五郎直宗は幼名宇三郎であった。寛延元年（1748）大町で生まれ、幼くして菅谷氏の養子となった。兄吉五郎がいたからである。宝暦８年（1758）その兄が13歳で死去、実家に戻って嗣子となり、安永９年（1780）父直重が61歳で隠居した後を享け家督相続、天明元年（1781）９尺×２間半の土蔵を建てた。現代の概算では３メートル×５メートルの建物となる。

彼の代には「家譜」によれば天明４年（1784）60両の御用金を申渡されたのを初め、度々の上納金が請求される。封建時代の城下町商人の生活を知る上でも意味があるので、記述してみる。この60両は「寅年類焼ニ付仮住居且隠居長ノ大病難渋ノ趣」を申し立て「拾五貫文ヲ上納残リ御免」になった。寅年は２年前の天明２年である。金貨60両は江戸と上方でも両替の比率が異なるし、時代でも違いがあるが、元禄の定めでは１両は４貫文であった。幕末には6.5貫文位であった。尚１貫とは1000文である。何れにしろ極端な減免である。しかし同５年にも銀１貫目を仰付られ半分の500目を上納した。元禄の定めで金との比は60目で１両である。同７年には５両仰付られたが３月に類焼したと申立て１両１歩上納した。１歩は１両の４分の１である。寛政３年（1791）正月御用銀250目仰付られて上納。同年３月に丁割御用銀100目仰付られて応じている。この年には菩提寺の萬雄寺に毎年３石６斗３升ずつ布施できる田地を寄進した。同８年には弟の源太郎直晴に、丁内の北側に間口２間の屋敷と土蔵を併せて与え分家とした。直晴は菓子商を営み、文政７年（1824）世を去る。彼の後を嗣ぎ分家２代になったのは本家８代直明の弟萬之助直栄であり、３代は平鹿郡薄井村出の婿養子庄治であり、４代目は庄治を父、直栄の長女ハツを母とする久吉であった。久吉は明治13年（1880）45歳で世を去っている。

８代直明安永８年（1779）に生まれ、寛政12年に父直宗の逝去で家督を嗣いだ。未だ数え年22歳なので、叔父直晴の協力で家業を行ったが、家屋敷を増やし、叔父直晴の為に隣家武田四郎右衛門の土地を買求めたりして、菓子屋を止め酒造業を営ませたりした。城下町における地位も向上した訳で文化11年（1814）４月には「山王御続相勤神官トナル」とある。神官は現代で言う神職になったわけではなく、氏子を代表して八橋日吉八幡神社の例祭の統人になったことであるが、町人社会の大栄誉であったことは確かである。萬雄寺にも文政４年（1821）先祖両親先妻の居士・大姉号を許されるべく、京都大仏師から８両２歩で求め、１歩の運賃で下した直径２尺４寸、筒周９尺５寸ぐらいの太鼓１筒を寄進した。白岩雲岩寺英嶽和尚の上洛に託して買ったものであった。元は梅津の家来だから主君同様の霊位を憚ったが、町人になり商家として「分限ノ族ハ多分居士大姉号唱候ニ附」ということで「号」を求めたのである。この理由は、士農工商社会における身分も金力と軽妙な関係にあったことを如実に語っている。

彼の代も文政３年には佐竹江戸上屋敷焼失によって銀３貫目を３月８月12月に分けて上納し、同12年（1829）には15両を感恩講設立の為に上納している。『千蒲氏家譜・永代記』の著述は熟練の研究者を擁する「秋田姓氏家系研究会」であるが、その第三章の中に「上納金等一覧表」が整理記載され、さらに天保２年（1831）調達金50両、同５年に冥加金銭1250貫文、同年凶作救済10両が挙げられている。徴税というものは何時も厳しいものである。そしてこの冥加金上納を決めたのが２月で、月末の28日56歳で８代直明は没する。

ここで「若年ニテ家内相続無覚束」と「控」に書く９代直昌の時代となる。「家督礼相済同苗直栄ノ後見ヲ得テ家跡相続ス」と書くのは12月付である。数え年18歳の善五郎直昌は若いが士魂商才の人で、その証拠は相続後僅か５年、20代半ばで天保11年（1840）３月藩の御用油商人の地位を占めることである。しかもこの間相続翌年には冥加金30両を献上し、川反からの火事に類焼、姉フツ

の初めの夫粂之助が天保３年28歳で没した後、再婚の平鹿郡山内出身の千田慶吉が離婚したり、翌々７年３月に銭1000貫文の御用銀を上納するが、半面前年の火災で経済的に困窮し屋敷の一部や家財を売却したり、父の後妻が同７年に離縁。仙北郡花立に幼い娘トヨを引き取るのに一人扶持を与えたり、９年には祖母相沢氏が81歳で没したり、同10年（1839）11月24日当日生れの長男が死亡したりしたのである。長男は名も未だで伝わらないが、妻は叔父直栄４女リヨであり、即ち善五郎直昌は従姉妹と結婚した訳である。米も不作であったから不景気だったに違いない。その中で10年中御用銀500目を上納し、翌春御用商人の権を得たのである。勿論努力はあるが、並の才能ではない。

天保12年（1841）１月13日苗字公称を許された。本来名字とも書かれるが「名字帯刀」を公許されることは、士分に准じての処遇を意味する。千釜を千蒲に復した。だが14年４月18日には妻リヨが亡くなった。18歳だとある。長男が生まれた際が新婚なら14歳のこととなるが、結婚の時と年は詳でない。翌15年長女セツが誕生したと「千蒲氏略年表」にある。「家譜」にはセツは文久元年（1861）角館の佐藤政治と結婚し、翌２年19歳で男子を死産したうえ死去したとある。一方「弘化２年（1844）彼28歳のとき、南秋田郡天王村の肝煎、児玉庄三郎（児玉倉治の父）の二女シノを妻に迎えた」（第三章三　P.189）ともいうが、理を採れば天保14年にリヨが死去し間もなく児玉シノと再婚し、15年中に長女セツが誕生したのであろう。

弘化２年（1845）御用銀200目上納、３年萬雄寺に祖師木像寄進し、家の普請をした。翌嘉永元年（1848）３月長男直政幼名泰吉が誕生、同４年御用銀700目上納、７年萬雄寺に台座共高さ約８尺の石地蔵寄進、冥加金20両上納、次女チエ誕生、土蔵建替・神明堂建立と物心両面の家運充実を示し、同年年号が安政元年に変ってからも分家二代直栄らと親類菅谷清蔵家の再興に3000貫文を出し合い、藩主義睦入部費用冥加金20両を上納する。

安政３年（1856）御用銀１貫300目上納、４年同じく銀１貫500目上納、５年１月５男栄蔵誕生するが８月大火で類焼、６年調達金13両上納、万延元年（1860）４月類焼、５月塗家という外を土壁にする家を普請し、この頃草生津川の油に取り組むようになる。御用金３両上納。文久元年（1861）御用金２両上納。３年にも御用銀500目上納、元治元年（1864）３月類焼、５月に普請、９月20両の調達金上納、慶応２年（1866）４月御用金20両上納、八橋戌川原で油をツボで採取する。いよいよ石油の千蒲善五郎の活動である。３年６月義倉の為の金10両献納、９月調達金35両上納、王政復古の号令が出る12月には調達金50両を上納と続く。まるで火事と上納の城下町商人の生活である。

慶応４年（1868）４月には戊辰ノ役で御用金25両・御調達金27両を上納した他、陣中見舞に筋子30樽・梅干20樽・金４両を献上している。もちろん「官軍御取扱支配人」になったというから仕事上の活性化は得たことであろう。調達金というのは強制借り上げなので何れ返金されるものであるが、元利完済などということは、武家封建時代の支配形態からして考えられない。８月にも調達金20両と13両とを１週間違いで上納している。戦時公債を買わされるのと同じである。

明治と改元されて２年にも11月調達金20両上納したが、前年手掘りに成功したという戌川原の石油のために、長男泰吉と新潟に製油法の視察をした。主家だった梅津家は衰退し久保田を離れたという。３年になると八橋の帰命寺境内に蒸溜釜２基を据えて精油所を設けた。３年３月下中城の久保田藩庁舎普請のために冥加金300貫文上納、６月にも冥加金36両上納と続く。４年（1871）藩名は秋田に改められたが４月調達金25両を上納、７月14日秋田県となる。

新時代の文明開化、５年５月に東京から２個買い付けた秋田最初の石油ランプを自宅前に点灯し、その明るさに通行人は驚き人垣が出来た。ランプと石油を販売し、12月には長野石炭油会社の支社が上米町に開かれ柿岡源十郎・大縄織衛などと関与事業を進め、９年（1876）には泉村旭川でも採油に成功し文字通り石油の千蒲になった。

だが「好事魔多し」であろうか、６年12月に住み慣れた上通町の家屋敷を手放した。「年表」によれば佐藤文右衛門の借財のためだという。分家に同居の後７年４月保戸野中丁に居所購入転居した。落着いたであろう10年（1877）11月新作機器

の試験中に発火し、家財道具まで全焼した。

11年には長野石炭油が新潟や長野の事業失敗や内紛で会社解散となる。12年に11代になる孫信一郎が5月に誕生するなど気運の転機も見えた。母は中川氏である。17年(1884) 3月泰吉直政の次女ナヲが生まれ、18年には石油ランプの普及著しく事業も展開を見せており、泉の五庵山に精油所を移転した。19年には俵屋火事で保戸野中丁の家を焼失したが、泉に移転した。家を40円で購入したという。大阪鉱油との協同事業契約も結び翌年は神戸の後藤勝造他に譲渡の契約をした。この年直政次男誠治が誕生。この頃から「家譜」「永代記」の整理著述を始める。

明治22年(1889) 市町村制施行で小泉吉太郎が初代市長となる。7月佐竹旧知事来秋敬老表彰を受けたと伝えられるが、佐竹義堯は17年に世を去っている。12月8日石油翁は逝去。行年73、墓所は萬雄寺。

寺崎　廣業

慶応2年(1866) 2月25日久保田城下東根小屋町で、父廣知母ひさのもとに生まれたとある。実は両親離婚後で、疋田家老家の出である母が、古川堀反の実家に戻ってから生まれた。今のカトリック教会の地である。母は後に佐藤家に再嫁している。寺崎家も常陸以来の門閥で祖父廣道は家老であった。廣業はだから祖母に育てられた。幼名忠太郎で4歳ぐらいから絵筆に親しんだ。廣業は画の雅号ではなく本名である。天性画才があったのであろう。明治2年(1869) 日本社会は大きく変わり、版籍奉還となり、その後父は教育振興を目指し五丁目小学校を開いたと言われるが、長続きはしなかった。まだ学制発布以前のこと故、着眼は良かったにしてもあまり堅実な計画性はなかったのかもしれない。次に関わった会社も、料理屋も、武士の商法で失敗し、横手で氷屋を営むことになる。推量するに横手城代戸村家が寺崎家と親族だったから便宜を得易かったからであろう。廣業自身も横手で暮らしていたわけである。

もちろん横手に移住する前には、明治3年5歳から久保田で名のある根岸謹之丞に漢文と習字を学んだという。7年(1874) 4月附属小学校に入る。秋田の近代教育は教員養成の伝習学校が6年11月7日に開校、7年5月22日に先にあった洋学校と伝習学校を統合し太平学校としたから、その附属小学校であろう。10年(1877) 7月秋田中学校に入ったが、学資が続かずに退学したと伝えられる。それも太平学校から分かれた中学校に当たる課程のことと考えられる。

明治13年(1880) 数え年15歳になり昔流には大人になったという自覚があったのであろう、横手の父の許を離れ単身秋田に戻った。住まいも必要だったろうから幼時乳母だった人の処である牛島の長谷川という家に寄宿し、素麺業に従事したという。翌年医学校に入学したが経済的には苦しく教科書も写して用意したと伝えられるから、結局16年5月に退学してしまう。しかし別の見方もできる。16年2月から秋田で名のある狩野派の画人怡々斎小室秀俊に入門しているからである。怡々斎は彼の才能を愛で名から秀を号から斎を取り「秀斎」の号を与えた程であり、指導も入念であったと考えられるし、廣業の側もそれに答えて画業に自信を持ったに違いないということである。

幼時から好きだった絵の道で身を立てることにした彼は、17年(1884) 19歳で県北への旅に出た。先ず阿仁鉱山に至り、技師の守田兵蔵に絵師として評価され逗留した。だが若輩の画家が絵の注文だけで生活を成り立たせることは難しい。もう一段北の花輪に赴き郡役所の吏員となり庶務受付係になった。時の鹿角郡長は戸村義得であった。旧横手城代戸村氏が寺崎氏と親類だったことは既に述べた。当然その縁故は作用したことであろう。

やがて登記所が新たに設置されそこの雇書記になった。まだ官員制度が近代的完成はしていなかったが、雇員というのは傭人よりも正規的上級の職員で、今風に言えば初級の地方公務員になったわけであろう。生活は一応安定したろうが、絵師としては満足な環境ではなかったと思われる。

転機が訪れた。東京府小石川区大塚仲町に薬屋を営んでいた同母次弟の佐藤信庸が、絵の勉学を考えてであろう上京をすすめて来たのである。明治21年(1888) 2月上京した。23歳である。22年の「市制」実施寸前でまだ東京市ではなかった。当時東京下谷区西黒門町には角館出身の名画家四

条派の平福穂庵が住んでいた。入門を希望したが怡々斎に遠慮したのか別に１室を与えて直弟子とはしなかったという。

穂庵は繊細緻密で廣業は豪放磊落だったという。性格の異なる芸術家同士では合わないところもあったらしく、４ヶ月で彼は別居独立を試みた。穂庵は探し求めて中村蘭台作の三個の印形を呉れたという。廣業はそれを持って遊歴の途に就いた。初めに連絡があったのであろう足尾銅山を訪れた。そこには阿仁銅山で親しくなった守田兵蔵がいた。守田は彼の為に道を開いてくれた。自分の親戚である日光の大野屋旅館の住み込みを取りはからってくれたのである。一年半の日光時代は廣業に大きな意義をもたらすことになる。

旅館の手伝いをしながら、絵を描いた。ことに美人画が人気を得て注文も多かったという。筆者は平成２年３月29日に「山種美術館」で『美人観花』という廣業の絵を見たことがあるが、目が吊り上がり、鼻がツンとしていて、瓜実顔で斜に構えているという印象であった。日光時代の美人画について秋田文化に詳しい粋人奈良環之助筆の「その頃の美人画に一つのエピソードがある」という紹介記事が『秋田の先覚』１（秋田県）にある。引用してみる。

> 表具師に宇賀神という人がいた。その人の注文によって「江口の君」を描いた。－中略－象に乗った艶麗な遊女の姿である。－中略－イタリーの観光客が買って本国に持ち帰った。－中略－駐在記者渡辺紳一郎が、偶然にもその絵を自分の下宿屋で見つけた－中略－観光客の未亡人の家であった
>
> －中略－買って日本に持ち帰ったのが、日光で描いてからちょうど四十八年目で、そのとき広業はすでに故人になっていた。

廣業の日光での美人画・風景画は『日光廣業』と称し、彼の作品中に「一画格」を持ち「風景画には、穂庵風がうかがわれる」というのが奈良説である。経済状況も改善され東京に帰った彼は直ぐ穂庵を訪問、東京を引き揚げるため出版社東陽堂に寄寓中の穂庵は、彼を東陽堂主人吾妻健三郎に紹介し、同堂の絵入り誌に縮画・挿絵などを描くことになり、写真を用いない時代とて好評だった。文章は吾妻の同郷山形県人の渡部乙羽が書いた。後の大橋乙羽である。３年間この仕事をした。

明治23年（1890）内国博覧会で「東遊図」を出品し褒状受領。翌年岡倉天心会頭の日本青年画家協会の展覧会に「藍采和」出品一等賞となる。25年各種受賞を重ね村田菅子と結婚する。画家村田丹陵の姉である。向島に住みこの頃天心に認められる。26年から弟子も取り始め長男廣載が生まれた。27年向島で３度引っ越し風流な家に入ったのに、千葉に写生に出かけた留守中下女と子どもだけのところで火事があり、財産や収集資料が烏有に帰した。此の年北海道旅行で利尻・礼文まで行く。函館でも２人入門し弟子は７人になる。29年次男廣民誕生。

明治30年（1897）前年図案科嘱託として橋本雅邦を助けていた彼が、この年３月東京美術学校助教授となり、父を根岸に移った家に呼び寄せたが、31年３月学校騒動で懲戒免職となる。４月長女チエ子生まれ、７月日本美術院創立正員となる。連合絵画共進会で金牌はなく銀牌を大観・観山と共に受賞。11月から12月天心と仙台・盛岡・秋田・大曲・横手に出張する。34年（1901）５月自宅の床から筍が芽を出し、漢詩人小野湖山から天籟散人の号を受け、塾は天籟画塾、家は騰龍軒と称した。９月下村観山と美術学校の教授になる。

明治35年（1902）「今様美人画」「大塔宮」など出品。高等官七等になる。36年秋田の土田万助など有力者と交遊後援を得る。37年３月「戦争画取調」の委嘱で美術学校休職満州に渡る。８月美術学校に復職。戦地には門人三浦北峡を同道、御用船第一八幡丸中で「軍神」と謳われることになる橘中佐と親交、皇后陛下下賜の当時少佐の肌着に軍刀と桜花に日の出の絵を、軍隊手帳に半身像を描いた。戦地三ヶ月健康を損ね帰国し、38年８月村田丹陵と戦争の記録画帳を合作。

明治39年「天平美人及び唐美人」を、40年「大佛開眼」を出品、42年従六位高等官五等になり信州を好み訪れる。京舞妓の写生をする。43年（1910）天籟塾第一回寺崎廣業展を開催約200作品出展。６月から８月まで横山大観と清国旅行、秋の文展に「夏の一日」「長江の朝」「長城の夕」など出品。大正元年（1912）「瀟湘八景」を第六回文

展出品。2年美術学校日本画科主任となる。3年7月、門人町田曲江の故郷近くの信州上林温泉に別荘落成、第八回文展「高山清秋」、翌年第九回文展「信濃の山路」など出品。

大正5年5月第一回天籟画塾展、門弟は約300人。高等官三等従五位になる。6年5月第二回寺崎廣業展が開かれ過去7年間数十点の作品出展。6月帝室技芸員に任命される。10月第十一回文展に「白馬山八題」出品。この作品については平成16年2月19日付秋田さきがけ夕刊文化欄に森田溥氏（横手市）の適評があった。

大正7年(1918) 3月次男廣民の死去があったが、塾生達から、技芸員拝命・菅子婦人との銀婚式・小石川区関口町の風雅な豪邸落成の三慶事を祝し、内藤伸作木像を贈呈された。夏から咽頭の痛みが生じ、第十二回文展出品「杜甫」の大作も三連作予定が中央の人物だけになった。箱根や信州で静養につとめたが、11月には美術学校教授・文展審査員を辞任する。

8年2月病状はすすんだ。帰依していた曹洞宗管長日置黙仙禅師は「生死を超越せよ」と説き、「澄心庵大悲廣業居士」を生前に授けた。耳鼻咽喉科の同母長弟佐藤信郎博士に見守られ、周囲に挨拶や訓戒をし、21日午後3時 50分逝去。行年54歳。浅草総泉寺の葬儀には3000人が会葬した。上林温泉の別荘は、黙仙禅師の夢枕に立った廣業の願いに依るとのことで、永平寺に寄進され長寿山廣業寺となる。

鈴木　空如

明治6年(1873) 2月25日仙北郡小神成村桜木で虎之助・フミの3男として出生、名は久治。長信田村の成立は明治22年である。本家の六左衛門家は元親郷肝煎の家柄で館腰の家と呼ばれた。3男の彼には兄が2人、姉が3人いて末子であった。幼時から画才があり、10歳位の際の大作も生家に伝わるという。姉の夫の甚一郎の父である高貝源十郎が校長で薫陶を受けた太田学校（今の太田東小）を、前後期8年間学んで21年(1888) 3月に卒業した。1年間温習生となり22年3月まで補習学習をする。温習とは繰り返し学ぶことである。

それから3年2ヶ月農業に従事し、25年(1892)上京する。前年今の東北本線が開通していた、黒沢尻（北上）駅に向かい、早朝家を出て、猿橋村（沢内）で握り飯の昼食をし、湯田村に一泊し、翌日夕方駅に着き、夜行で上野に向った。東京では本郷区元町2丁目水谷吉平方に止宿し、近くの元町1丁目の長山蘭林に師事、日本画を学んだ。

26年8月東京美術学校に入学手続きするが、期限遅れで不許可だった。この為に27年になると徴兵検査を受けることになり、近衛師団に入営し工兵隊に所属し翌年清国に出征した。大陸から更に台湾に転戦し、父の編んだ特製の「わらじ」を使用し、官給のそれは戦友に与えたという。日清戦争の時代に日本軍が未だわらじ（草鞋）を履いていたのか不思議にも思うが、工兵隊なので作業の関係上草鞋を着用する場合もあったかもしれない。10月24日赤羽の営舎に凱旋したという。史料には「工兵第十八部隊」とあるが、明治に部隊と称していたか否かは知らない。多分聯隊とか大隊とかが赤羽にあったのであろう。

明治31年(1898) 9月26歳で東京美術学校日本画選科に入学した。3月に岡倉天心（覚三）以下多数の教官が退職し、秋田人寺崎廣業も辞めた後の美術学校である。8月就任したばかりの山名貫義教授に師事し、仏教古美術の研究・模写などを学び伊勢流有職故実学習にも励んだ。少なからず超俗的な分野の勉強をしていたといえる。下宿は下谷区上根岸町105番地で賜硯堂経営の書家成瀬大隅方で、33年(1900) 2月下谷区中初音町3丁目23番地の提灯屋大野清方に転居した。家賃が安い故であろうか。大隅の他界も理由であろう。

同期生には六郷出身の小西正太郎や後年『智恵子抄』で有名になる高村光太郎がいた。上級には平福百穂がおり、1年下には秋田の小場恒吉がいた。34年(1901) 7月31日東京を発ち8月2日帰省した。この8月に同期生足立啓が出した修学旅行についての書簡に「鈴木天民」という宛名が記されていて、天民の雅号を用いていたことがわかる。なお水谷方に宿っていた25年頃には「長春」と号していたという。皆川昇筆の『秋田の先覚』5によると「今日ではただ一点、郷里の高見久右エ門所蔵の『金鶏鳥』に長春の落款がある。－中略－彼のはほとんど無落款の絵、仏画であって、

ここにも空如の態度と奥床しさをうかがうことができる」とある。1500年前の仏師の精神に通ずるものがある無落款だというのが皆川説である。

34年９月20日から10月５日高村光雲の引率での奈良・京都の修学旅行では、費用の為替が出発前夜に届いたために翌朝の新橋駅集合に間に合わず、一人で奈良駅前大文字屋に赴き皆と合流した。旅行日記は和紙76頁の詳細なものだという。34年には寺崎廣業も復職し、接触し得る状況になった。35年２月卒業を目前に研究科に進むことを決意する。３月卒業制作「十三佛図」に着手する。６月11日山名教授が亡くなるが７月２日午前10時校友倶楽部で第11回卒業証書授与式が行われ、在学中無欠席で精勤賞を受けた。そして研究科に進む。

明治36年（1903）５月下旬大阪での第５回内国勧業博覧会を観に出かける。仏画師として当然だが関西への関心の深さがわかる。この年に郷里隣家の石崎順治という人が上京し彼の下宿を訪ねる。多分余りにも簡素な生活に衝撃を受けたのであろう「楽しみは何か」と問うたという。答えは「別にありません。強いていえば自分の描いた仏画を何時間でも見ているのが楽しみです」と答えたという。そして蚕豆５粒を皿に盛って進め、それがご馳走だったという。この頃に法隆寺金堂壁画の模写に着手したと認められる。日暮里早川平八方に下宿していた。

明37年７月美術学校研究科を修了した。８月９日卒業生同窓会が校内で開かれ、正木直彦校長や寺崎廣業教授を含む73名が出席した。38年８月両親に「仏画専攻」を知っていてほしいと便りする。39年（1905）５月29日母方の従兄弟秋田市保戸野の戸沢久治が彼の長兄実業の長女松代に宛てて美術展覧会で、「坂本理一郎所蔵の法隆寺壁画の模写を見た」旨を知らせた。坂本は仙北郡千屋村出身の衆議院議員から貴族院議員になった東嶽と号する農政指導者で、空如の後援者である。姪の松代が東京の女子商業で行われる講習に出るため上京、空如の状況を「神経衰弱の気味に候故家にかへってそれから何処かの温泉場にて療治したいが、しかし金が要るから、今の処では残念ながら帰れない－中略－叔父上様の病気はそんなに悪い方でも無之候」（秋田県立近代美術館「図録」『鈴木空如』に依る）と家郷に報告している。その叔父は、仕事もなく元気が出なかったのであろう。

40年１月から３月まで西伊豆土肥村鈴木仁平別宅に滞在不眠症などの静養。この間山名貫義夫人が度々見舞い費用も支援したという。４月実業長男の甥鈴木重治がこの春横手中学を卒業し上京、予備校に通うべく彼のもとに７月中旬まで滞在勉学した。この間も４月20日土肥に再び赴くような体調だった。重治は９月11日に第二高等学校に入学する。42年重治は６月湯沢渡部病院に入院していて帰郷途次の叔父に会ったが、その時に話し合ったのか、やがて上京。日暮里早川畳屋に下宿の叔父のところで通院加療していた。そこにまた一人の重要な人物が登場する。中学校の同期（横手中学５期）の友人佐藤維一郎青年である。

昭和39年８月25日佐藤維一郎は『佛絵師の聖鈴木空如翁　維山老手記』を著作する。老手記と自称するように古い時期の細かい事実などには記憶違いもあるようであるが、全編四六判30頁は空如に近接した深い理解で貫かれているのである。

この著書に著者の写真はないが、近代美術館の図録には、P.70に若い学生時代の紺絣の著者の写真がある。「図録」奥付の謝辞に協力者として列挙される中の一人佐藤公一氏と実によく似ている。公一氏は、秋田大学附属中学校の卒業生で愚息の級友であり、若手実業家である。筆者は維山老は公一氏の父親かと思っていたが、実は祖父であった。「図録」によると著述の翌年昭和40年に逝去されたというが、「図録」写真の横には

内小友村村長・農林関係の国、県の各委員歴任。空如の思想に共鳴し、最大の支援者としてその生涯を支える。

とある。彼が重治を訪ねた時は慶応義塾大学予科生であった。佐藤家はこの地の素封家で、多数の作品と資料・書簡を伝えている。

明治45年（1912）また土肥で静養する。土肥には金鉱山もあったが温泉地である。４月には山陰に旅し出雲の竹田霞村という日本画家のもとに20日も滞在し返礼か「日蓮上人画像」を贈り終生便りを交わしたという。なお「図録」には「この時、旅先からの葉書３通に『長春』の号を記す」とある。さらに翌々大正３年（1914）の３月に「以降、

郷里宛の書簡に『空如』の号を用いる」とある。

大正５年(1916) ９月母フミ80歳逝去。11月頃上野寛永寺第５世貫首大照圓朗大僧正ら９人で姫路方面参拝旅行、密教や天台宗系統の仏画の勉強をした。また千葉県出身の仏師小川半次郎と相い知り終生仕事の上でも密な交流をすることになる。大正７年２月27日上野寛永寺月例会メンバー高橋逸馬の媒介で坂井ナヲ30歳と結婚する。日暮里の八畳一間の借家の婚礼の客は大僧正以下数名だった。彼は 46歳だった。既に婚約は整っていたが、相手が長の病床にある祖母を看病していて10年も延びていた由。『秋田の先覚』『佛絵師の聖』では「ナオ子」、太田町公民館『画聖鈴木空如』は「なを」、「図録」と大岸佐吉『信仰の仏画師鈴木空如』(春秋社)は「ナヲ」となっているが、彼は「妻こそは偉大な女性」といっていたといい、『維山老手記』と銘うった『佛絵師の聖』では昭和10年(1935) 頃のこととして「永く独身で貧乏生活と闘って来たが故坂本理一郎氏の勧告で、此の婦人と結婚し、お世話して貰って居りますよ」と空如自身が語ったと記している。東嶽も然るべき推挙をした立派な女性だった訳である。東嶽は前年４月３日世を去っているが、空如はその後も坂本家との間には深いつながりがあった。

大正８年(1919) ４月父虎之助84歳逝去、９年２月24日長女豊子誕生と家族関係の変化があったが、幼い娘の成長を入念に記し明るい期待と深い愛を示した。だが11年(1923) ３月甥重治が34歳で亡くなる。此の年、兄に十数年来の不眠・頭痛に悩まされていると訴えていたが、百穂が角間川浄蓮寺の曼荼羅について話に来るなど、その存在は大きくなっていた。また奈良在住戸沢久治を訪ねた戸沢の甥の高橋堯が、大曲人として法隆寺壁画模写中の空如を見た。事実此の年、金堂壁画模写第一作が完成した。翌12年大曲田口松圃依頼の小銅仏像を鑑定、長野大野忠右衛門依頼の浄聖寺本尊を調査、先の浄蓮寺の当麻曼荼羅調査など郷里に対し親しく貢献。兄実業にも「阿弥陀如来座像」を贈る。大震災の被害を幸にも免れたが、翌年３月兄実業65歳を失う。

大正14年(1925) 10月28日、愛嬢豊子を５歳８ヶ月で失う。喘息であった。大照圓朗師が「天月空光童女」と法名を授け、翌年一周忌に『豊子思いでの記』を書き「童形地蔵立像」を描く。

昭和７年(1932) 壁画模写第２作完成。３月上旬朝日新聞主催国宝仏画模本展が新宿三越で開催され、翌月浅草寺で法隆寺金堂壁画模本展と講演が行われ拝観人感嘆合掌し、芳崖慈母観音は鑑賞仏で自分の絵は奉安仏という彼の信念が形となった。壁画模写第３作に着手し、10年地方森林会議員を農林省から依嘱された佐藤維一郎は毎月のように上京『来迎図』を発注するなど支援関係が濃密になって行った。11年壁画模写第３作完成。12年には弟子入門の依頼を難事だからと実家に断る。３月熊野・伊勢を巡拝。６月佐藤に完成の「慈母観音」を送る。この月から井上廣居社長の求めもあり秋田魁新報に連載など多くの寄稿をするようになる。多くの作品を求めて貰った佐藤家を14年(1939) ５月17日訪問。15年５月「孔雀明王」を送る。上京の佐藤に「君は富と智に恵まれた幸運の人」と評言した。

16年(1941) 勃発の当時の大東亜戦争が、画作を不自由に追い込み、佐藤注文の「八天王」の像も、20年(1945) １月末には、完成できず、二尊については下絵しか示し得ない事態になった。物資不足だけではない事情もあった。既に19年春に茨城県石岡市香丸町に疎開していたが、20年座骨神経痛で立てなくなり「老妻の介抱のみに生き居り申候」と７月２日佐藤宛最後の便を出した。

農協差向けの車で松代と小枝(さいだ)の２姪に介助され、５月29日、小枝経営の箱根湯本の吉池旅館に向った。途次住み慣れた日暮里早川宅にも立ち寄ったが、７月21日吉池旅館で逝去する。数えで74歳。１年後郷里の菩提寺太田町百花山大薗寺に葬られた。

41年郷里に顕彰碑が建ち「空如画聖の碑」と記された。夫人は53年12月91歳で吉池旅館で亡くなる。郷里では空如忌も行われている。

金子　洋文

明治27年(1894) ４月８日南秋田郡土崎港町古川町で附船問屋の父は子之松母はヨシの子として生まれる。男７人女５人兄弟姉妹の四男であり、名は吉太郎。家は雑貨屋・蕎麦屋などを営むが業

績低調。父は体力は強かったが非文学的だった。母の実家は米屋でその父は俳人だった。男児には母の素質がより伝わるとかというが、彼の長兄9歳上の長吉も文芸投稿少年で、19歳で北海道に渡ってからも「中学文壇」に文・歌・句各分野に長麿のペンネームで投稿を続けていた。

33年(1900) 4月土崎小学校入学。教室で前方の席に近江谷駒や今野賢三がいたが、4年生頃にこの運命の仲間を意識したと自分が『種蒔く人伝』(昭和59・労働大学) で述べている。5年生から高等科まで橋本富治という先生から正義感やヒューマニズムを学んだという。野球や都会の音楽も教えられた。近代国家形成期に新文化を身につけている青年教師が発揮した指導力はどこでも大きい。そもそも尋常科6年生卒業時母に、兄2人も6年を卒え丁稚に出たのだから彼もそのようにせよといわれ、「んた」と答え新聞配達をしながら学んだ高等科の2年間だった。人間形成上積極的意味を持ったに違いない。

41年(1908) 3月卒業すると上京し芝区愛宕町山本電営社に勤め配線工事などに従った。支配人が秋田生まれの近江洋生で恩顧を受けたので、自分の海好きもあり「洋文」の筆名を用いた。就職は駒の父近江谷栄次代議士の紹介だった。そして東京でも洋文は、暁星中学の生徒だった同級生駒を毎日曜訪ね親交を重ねた。ところが2年経った43年春に、兄長吉が北洋のカニ漁で成功し金を出してやるといったことで帰郷し秋田工業学校に進学した。実は兄の事業は失敗し学費は新聞配達で稼ぐことになるが、中等学校は彼に必要な課程であった。大正2年(1913) 機械科7期生として卒業すると工業学校の助手となり、年末母校土崎小学校の代用教員になった。文学・哲学の本を愛読しバイオリンを愛した。

そして音楽にかかわる事件が起こった。音楽の教師が子供に教えた「カチューシャ」の歌の歌詞の間違いを彼が正したことが、この歌を教えたのが洋文だということになり責任問題が生じたのである。当時学校では、正課で習った唱歌以外の、芝居の劇中歌などの流行歌学習は正当でない事で正教員より代用教員に皺寄せが行ったのであろう。大正5年(1916) 10月辞職し、再び上京する。

今度は明確に文学を志向してのことで、明治45年に上京し5年7月には秋田や土崎で活動写真の弁士をして帰京したばかりの同輩今野賢三の住いに同居し、日本評論社に入社した。翌6年正月には千葉県我孫子町の武者小路実篤宅に寄寓するまでになっていた。年来傾倒していた白樺派人道主義に浸る日々であった筈だが、同派の文士と交際するうちに「馬には乗ってみよ」で次第に合わず批判的になってきたようである。夏には神田に移り住み記者生活に入っていた。簡単に言えば生活意識や態度が相反したのであろう。

さもありなんという展開になった。大正10年(1921) 2月25日、あの「種蒔く人」土崎版が発行されたのに参加する。直接の前提は前年夏に近江谷駒すなわち小牧近江と10年ぶりで再会したことにある。明治44年渡仏していた小牧は8年12月に帰国していたのである。10年10月「種蒔く人」東京版が刊行される。誌上には「眼」「廃兵をのせた赤電車」などを載せていた洋文が、12年(1923) には、小作の苦渋を書いた小説「地獄」(『解放』3月号) を発表した。川端康成も激賞し彼の文学生活で一つの節目になったと思う。

9月1日午前11時58分あの関東大震災が発生した。この時戒厳令下で幾つかの暗い事件があった。報道規制の中で敢然と秋田に戻った洋文と賢三は「帝都震災号外」を土崎で印刷発行した。さらに13年1月別冊の『種蒔雑記』という「亀戸の殉職者を哀悼する」40頁の東京版「種蒔く人」の22冊目を出し、雑誌は終刊となり、6月に「文芸戦線」を編集することにこの『雑誌』の精神は引き継がれていく。

実は彼には劇作家の立場も明白に存在していて「老船夫」(10年)「洗濯屋と詩人」(11年)「狐」(12年) などの劇作品を書いていた。この筋が作家活動を拡大する契機を導いた。13年浅草大衆演劇の喜劇役者四国出身の曽我廼家五九郎と交りを持った。新聞連載漫画で町田忠治のニックネームになるほど流行った「ノンキナトウサン」を、洋文の本で五九郎が演ずることになり、震災後の暗さを払う明るさが受け大評判となるのである。私生活でも五九郎一座の女優前田セイ子と出合い14年4月に結婚することになった。夫妻の間には大

正15年７月長女蛍子、昭和３年８月次女雪子、５年９月三女功子が生まれる（『黎明の群像』年表）。

劇作家洋文はさらに飛躍した。大正15年「剣」を演劇の雑誌に発表した。大正６年に新国劇を結成人気の沢田正二郎がそれを演ずる申し入れをし、殺陣を見せることになる。さらに「髪」「浪人の群」なども執筆し、大佛次郎『赤穂浪士』の脚色もした。沢田は早大、大佛は東大の出身である。秋田工業出身の洋文がそれに光を加えたのである。上記の『群像』には取材した分銅惇作元実践女子大学長談として「剣を持っている者が滅んでいくという内容。洋文の劇の中でも、あの新国劇は秀逸」という評が載っていて、筆者は若い頃読んだ『プルータク英雄傳十』の「敗れたものは泣き、勝ったものは亡びた」（岩波文庫・河野與一訳・昭和31年）というテルモードーンの戦についての昔の予言のことを想起した。洋文の平和哲学が伝わる話だ。

ところが沢正は昭和４年（1929）２月新橋演舞場でこの「赤穂浪士」出演中に倒れてしまう。だが洋文の劇作は一層充実し、昭和10年室生犀星の『兄いもうと』も脚色劇化したし、戦後秋田出身伊藤永之介の『警察日記』や『鶯』などの脚本も書いている。政治にも積極的で翌５年２月の第二回普通選挙には秋田一区から無産党で立候補した。数えて36歳で、当選はしなかった。法の成立は大正14年、第一回選挙は昭和３年。経済的損害も負わされた長兄の子を、中学から東大まで引き取り育成した。

昭和14年「秋田港の唄」の作詞作曲を行った。既に存在していた西條八十と中山晋平の「港小唄」に対する土崎人としての批判が秘められているという。品格ある愛郷心のあらわれであろう。それからの戦時数年は劇作などしていたであろうが、第二次大戦後、新しく出来た参議院議員の昭和22年（1947）４月の第一回選挙に、日本社会党から立候補全国区で当選する。左派。小牧近江の弟である社会党代議士島田晋作の強引な誘いがあったという。18万675票を獲得し文化人議員となる。

26年（1951）９月サンフランシスコ講和会議に出席。国会議員監視団の一員だったが、講和条約と日米安保条約の両方に反対する立場をとり帰国した。27年パリで開かれた第７回ユネスコ総会に両院議員代表で出席する。政府顧問であった。26年ユネスコに日本も加盟していたのである。この会議にはノーベル物理学賞を受けた湯川博士も出席した。面白い話も伝わる。初め文化人参議院議員の山本有三が出席する予定だったのに、大作家の山本も不眠症で出席辞退をしたのだという。

もっと面白いのは、山本議員が「金子君はいいよ、酒を飲んでぐっすり寝られるから」と羨ましがったというのである。『黎明の群像』の取材著者の大地進記者は、これを「洋文の豪快な一面がのぞく」と位置づけた。大地記者は秋田人である。多分然るべき酒量を持つに違いない。自身が愛酒家でないにしても周囲は酒豪揃いであることは確かである。だから「洋文の豪快」に理由を求めた。秋田生まれでない酒量の微々たる者からすれば、これは「洋文の秋田人としての酒豪の一面がのぞく」となる。山本有三は栃木県人だったと思う。

残念ながら28年の第三回参議院議員選挙には当選しなかった。労働組合毎に票割り当ての為だという。昭和57年（1982）11月２日秋田市文化功績賞を受け、58年９月妻セイを失ったが、59年６月20日秋田魁新報創刊110年記念章を受賞した。

そして翌60年（1965）３月21日東京の自宅で数え92歳で長逝した。墓所は満船寺である。

後藤　逸女

文化11年（1814）12月23日雄勝郡川連村野村の与七郎・ハルの長女に生まれる。一人娘で戸籍名はイチ。後藤与七郎は700刈（約９反）耕作していたという。母は増田の安養寺遠藤家の出である。野村の隣村落大館（『秋田風土記』では93戸）の井上武兵衛という川連漆器の蒔絵師が、弘化２年（1845）『夜籠雑談噺』を書いている。弘化２年は彼女32歳の時に当たる。その中には、５～６歳から好学で、７歳で周囲から惜しいと勧められて近所の師匠柴田儀助に入門し、11歳まで手習いしたことが記される。150人中１～２番の成績で、肝煎の佐藤七郎兵衛や大商人高橋利兵衛などが紙や書物など買い与えて後援し、源氏物語・枕草子・徒然草などの特別指導もうけたという。

12歳母から裁縫を教えられるが、機織りと共に

１年で覚えてしまった。そこで13歳になり絵心があるからと蒔絵を習わせると、２年間の稽古で一通り習得したので、師の武兵衛は「息抜き」に和歌を教えた。俳句や碁･将棋にも趣味は拡がる環境にあったが、結局は歌に長足の進歩があり、それを短冊などに記す書と共に近郷に有名になったという。手習い時代に古典の学習をしていたことから自然に和歌に親しめたのであろう。俳諧のように中世に起こり、その発句が近世に独立して俳句になったものに較べ、和歌は平安時代的古典性に根源があるように感じたものであろうか。

この歌才を愛でた藩士に国学者武士の大山隼人がおり、このことは武家社会において彼女の歌才が伸びることにもその令名が広く伝わるために大きく作用した。しかし彼女の実生活は必ずしも平坦ではなかった。16歳で婿養子を迎えた。当時の一人娘として若すぎる年ではない。翌年一子虎吉も誕生。天保元年(1830) 寅年なので虎吉と命名か。だが夫の名は伝わらず、離婚説さえあった。勿論それは地元稲川町の研究家高橋傳一郎氏の著作で否定されていて「逸女が二十歳の時死別」と記される。だが、その夫は「生来病弱」とされており、虎吉も少しく遅れたところがあったという。

然りとすれば家庭生活は決して幸福だったとはいえない。その中で藩の役人の目に留まる程の歌作力を身につけるとは、やはり生来の才能と血のにじむ努力があったものと思われる。生活の苦を歌学が救ってくれた面もあったのであろう。

大山は藩校和学方御詰並という役目を務めた、平田篤胤門下で歌詠みでもあったという。高橋克衛「後藤逸」には「隼人は逸の歌の天分を知り、小安への行き帰りには、必ず逸に立ち寄って、歌の指導をしてやった」(『秋田の先覚』１）とある。小安は伊達藩との領界である。

同時代史料の『夜籠雑談噺』に拠るのであろうが、高橋傳一郎『後藤逸女藻塩草―史料と背景―』(桂文庫）によれば、「小安温泉に湯治の道すがら」で、初対面のことも『逸女史真筆集』にあるとして明確に紹介している。それに拠ると、逸が用水堀で野菜を洗っていると深編笠の隼人が「ここらあたり名のある桜あるときく」と問い、「山田のかかし人と見るかや」と彼女が応じたという話が地元に伝わる由、湯沢の本陣に10代藩主義厚が彼女を召し「秋蛍」の題詠の歌「石に火のうちいづるよりはかなきは秋の蛍の光なりけり」と詠み盃と菓子を与えられたことも、すべては隼人の推輓による。彼女はこの時17歳だったという。

そうなればこの年にお産をし乃至は妊娠中の体である。高橋氏の年表（上記桂文庫・『絵本・後藤逸女』）によれば、同年欄に夫と死別することを「まもなく」と表記されている。夫は病気だったかもしれない。勿論上に引いたように「二十歳の時死別」とあるから、間もないとは３年間の意ということになろうが、何れにしても彼女の身辺は安泰という状況にはなかったのである。

それなのに久保田城にまで呼ばれて70日も80日も泊まることがあったという。困っている時期と登城していた時期とは同じではなかったのかもしれない。それにしても村の女性が、士分の者の娘でもない若い夫持ち子持ち女性が、村方の実生活を離脱して城下に出向いていることなど普通できないであろう。それが出来たのは武家支配機構の必要と認めるものがあったからである。この点からも彼女の類無き存在感を、全く異なる現在の社会から見ても察知することが可能である。

だから大山隼人もこの少女妻を惜しみなく評価したのであろう。重ねて指摘することになるが、田舎娘ともいうべき立場から、全国にも名声響く立場に至るためには、佐竹の文人藩士吉川忠行・荒川秀高、西善寺の僧蓮阿、能代の歌人村井政直などの歌の指導を必要としたが、その高度の指導をしようと彼らに思わせるだけの、挙措とか進退とかを身につけていた訳であろう。根本的には生まれながらの人品骨柄を備えていたものに違いない。相俟って好学の彼女の学習上昇力があることは当然である。やがて江戸藩邸にも召出されるに至る。「逸女はこの時二十一歳」との説（高橋長蔵「女性のかがみ後藤いつ女」）も『ふるさとのひと』の書中にあるが、それも定かではない。

天保８年(1837) ５月の熊谷新右衛門『秋田日記』は４日条に「水なしと八ツ表の間におゑつといふ女あり遊名は越めといへり此女能書万葉集を書候見其外たんざくしきし等江誠ニ能かけり秋田の名物也」と記し、14日条に「咲花の中にめにた

つ柳かな　山家人ハ花の散ををしまれるやと言ケれハよめる　ちるををしむひとのこころのをくふかき東のはても花の都も　越女－中略－右は水なしと八ツ表之間野村といへる所の女なり年廿四才珍しき女也此向に右の越女之師匠の程の女有名は民女といふ是は本読なり誠ニ内ばニ而とてもやさしき風所ニまれなる人物也芝田道之助といへる医師之娘ニ而女は拾人並より少しよろし越女も女は民女よりは少々ならずよし其上当時後家ニ而このましきなりふり我等共尋参候所田うへに参り留守なり迎を遣しよびとりてたんざくを三枚かゝせ外色々かゝせ候誠にかゝる邊鄙ニはめつらしき事なり」と記している。既に「花の都」を彼女は体験しているように解されるが、家郷にいた。すると藩侯側室松操院が江戸下谷邸に下女ではなく教育の為に呼んだのは此の前であろうか。

義厚夫人は富山松平氏の出で、天保11年(1840)に亡くなり、後の夫人鳥取松平氏出の人は、天保13年７月18日輿入れで８月８日に亡くなっていて、初め阿部氏後奥氏である松操院は側室ながら、既に長じて宇和島藩主伊達宗徳夫人となる姫お佳の方を出産していたと考えられるから、下谷邸での実力は然るべきものがあった筈である。

逸女が親密に指導受けたのは、松操院侍女綾瀬局であった。本名小林すめで若い頃は染井局と称し結婚して一人娘の鶴女を生んだが、夫を失いまたお局務めに復し綾瀬局と称したのであろう。この人は初め女性右筆だったという学力秀れた人で、佳姫の学習指導に当たり、佳姫が安政３年(1856)になり嫁ぐに当たり、お里役として伊達家に移ったが、尚綾瀬局と逸の二人の間は依然親密で伊達家の歌会の情報を伝えたり、元治元年(1864)短冊300枚を逸女に贈ったりするのである。江戸から戻って間もない頃の書状と高橋氏が考証している逸女が局に出した文面の、「藁屋にて人となりしを宮の見（御）手ふり教へ導き給ふなどへだてたまはぬお恵」という表現は千万言にも勝る意味を持っている。

江戸では北村季吟の子孫季文など著名学者に師事させて貰った。嘉永元年(1849)父の病気で帰郷父は同５年に死去した為に、中風になった母、持病の長男虎吉を抱えて家郷を守ることとし、下男の磯吉と農事に従い、やがて養子にした磯吉は小七郎と改名嫁を迎えて分家させるという配慮をして、貧しい生活を気高く続ける。今から見ると彼女の江戸出府と帰郷とについての正確な日時決定史料は乏しいようである。だから「江戸に上って本格的に和歌や歌道に精進したのは・・・天保末期から弘代年間にかけてである」(高橋『藻塩草』)という結論になるのであろう。だが嘉永６年(1853)15歳の藩主義睦が母院と共に初入部の際に40歳で湯沢で出迎えたというのだから、出府も江戸での歌友との交際も信州への旅も、もうこの段階では過去の思出になっていたものと思える。

安政２年(1855)10月初孫の卯一郎誕生に綾瀬局の祝状があり、慶応４年(1868)５月59歳で逝去の松操院の形見として「竜紋の小紋」や櫛が贈られたというから逸の社会的地位は理解に難くない。『秋田日記』に伊達領の人物が「珍らしき女」「秋田の名物」と表記していたのとは違っている。だから初孫誕生の翌年末に伊達夫人になった佳姫が、身重の状態で同母弟佐竹義睦が安政４年(1857)７月１日久保田で19歳の若さで病歿した際にも、江戸藩邸から運吉なる人の手紙で、４月に土佐山内家から佐竹家に入ったばかりの新妻お悦の方の悲嘆など、邸内の状況を逸女に伝えて来るのである。翌５年孫直二郎が生まれたが直後母親が死去、彼女は２人の孫の養育も担った。

青年石川理紀之助が増田町万福寺住職の示唆で川連の豪商高橋利兵衛に奉公、主人の導きで歌の弟子として入門するのだが、師は50歳、彼は19歳、文久３年(1863)のことである。

やがて戊辰ノ役戦火は川連にも及ぶ。若き日平田篤胤や鈴木重胤の講義も聞いたと手紙に書いていたという彼女の勤王心は燃えたが、貧しく高橋利兵衛からの上申で、明治４年(1971)２月29日岩崎藩知事佐竹義理が巡察して賞し「愛日廬」と家に賜名し家族１人に１日米５合の扶持を与えた。11年母が83歳で世を去り激嘆する。吉野金陵が『孝婦伊津傳』撰文。14年角間川村の奉納歌会の選者となる。16年(1883)３月虎吉と曽孫ジン７歳との３人家族となり、５月29日逝去70歳。菩提寺は神応寺。

小林　多喜二

明治36年(1903) 10月13日北秋田郡下川沿村川口17番地に父末松と母セキの次男に生まれる。父は38歳母は30歳の時のことで、兄の他に姉のチマがいた。母セキは釈迦内村木村伊八の娘で明治6年生まれ、明治19年(1886) に数え年14歳で嫁になった。40年1月に妹ツギが生れた。北海道小樽で三ツ星堂というパン屋を営んでいた伯父慶義に引取られ中学校入学を目指していた兄の多喜郎が、10月に病歿してしまう。明治28年生れの13歳だったのである。

12月下旬に兄慶義のすすめで末松は家を挙げて小樽に移住した。慶義は初めは敬吉といった。川口の小林家は本来裕福な家だったが、慶義が事業に失敗して貧しくなり、彼は東京に移った後明治26年に結局北海道に直行したのであった。31年に菓子屋を後パン屋を開いた。ジョージ・ピアソンという牧師に製法を習ったという。41年には港に停泊の軍艦や北海ホテルなどに納入していたという。だから甥が死んだ段階で、奥羽線の建設工事でトロッコを押していたような弟夫婦に新天地移住の誘いをしたのであろう。

平成15年(2003) 10月に『大館市先人顕彰祭』が催された。その『全記録集』の中に「小林多喜二の母セキ生誕地の碑建立記念講演（資料)」という日景健氏の業績が収録されている。極めて細かい内容の研究である。それには、文久元年(1861) 下大野村に生れ秋田師範学校を卒業し、川沿小学校に勤務していた安倍弥吉という教師が、小林多吉郎（末松の父）家の離れを借りて夫婦で住んでおり、明治39年12月に小学校長現職で死去したことが、「間貸しの金は、末松家にとっては貴重な現金収入」だったろうから、一家移住の背景にある一つの理由だろうと記されている。興味ある説である。

42年(1909) 12月に弟の三吾が生まれた。多喜二は終生長じてN響のバイオリニストになるこの弟を可愛がった。翌43年区立潮見台尋常小学校に入学する。小学校を卒えると大正5年4月北海道庁立小樽商業学校に進んだ。伯父の小林三星堂パン工場に手伝いながら通学し、絵画の部において活躍する。線も色も軟らかで暖かい感じの絵を描いている。翌6年(1917))校友会誌「尊商」の編集委員となり、12月に出た第1号に表紙絵を描き、「今は昔」の文章を書いている。また「文章世界」に詩を投稿入選するなど、文才を示し始めている。

大正10年(1921) 3月小樽商業を卒業し、5月小樽高等商業学校に入学する。志賀直哉文学への志向を強める。志賀は宮城県出身で東大中退白樺派の文学運動の中心にあり、武者小路実篤とならぶ存在である。東北人の共感があったのかもしれない。翌年4月校友会誌編輯委員に選ばれる。大熊信行教授を知る。教授は明治26年生まれの山形県出身東京高等商業卒業小樽高等商業から高岡高等商業の教授となるが、中学生時代から作歌に精進し、大正2年土岐善麿の生活と芸術に加わった人である。きっと彼は教授の文学性に魅力を感じたのであろう。筆者はその後山形県地労委大熊会長を初めて知ったが、大熊教授はその後富山大学、神奈川大学、創価大学の教授を勤めた。生徒の編輯委員は小林の他に高浜年尾・佐々木妙二らがいた。

年尾は正岡子規命名の高浜虚子の息子であった。また佐々木妙二は本名は重臣で彼と同じ明治36年大館地区出身であった。祖父重和・父稲雄は共に歌人であり神職であった。重和は弘化元年(1844) 生まれで釈迦内村長・県会議員・神明社神主などを勤め明治31年世を去ったという経歴の人である。その家系に生まれた重臣は大熊教授の講義を受け、歌誌「まるめら」創刊に参加した。卒業後秋田師範学校の教師として英語・経済を教えるが、教職を離れ東京医学専門学校に進学した。平成9年に93歳で逝去するが、長男が著名な歴史学者潤之介氏である。同じ北秋に縁ある級友に彼は親しみを抱きながら編集業務をしたのではないだろうか。「新興文学」「文章倶楽部」等に投稿入選する。学校の成績は優秀だったが、「国語漢文」のみは、1学年で41点、2学年で39点だった。文学青年にとって教科の国語は味気ないものだったのであろう。だからその翌年の1月には志賀直哉に手紙を出し、その文学性の深化を示している。

大正13年(1924) 3月小樽高商を卒業し、4月に北海道拓殖銀行小樽支店に就職する。同人誌の「クラルテ」を島田正策らと創刊して創作活動を展開した。誌名は第一次大戦直後フランスの作家

アンリ・バルビュス創刊の雑誌と同じである。その意味では小牧近江の立場と通ずるものがあるともいえる。8月に父末松が死去し一家の柱となる。

その10月に運命の出会いともいえる田口タキという女性を相識ることになる。「やまき屋」で借金の為に酌婦をしている美しい女性だったという。本来は室蘭で10人家族の生活苦を救うべく、長女の彼女が10代半ばで売られ、後に小樽に移って来て、彼らの仲間と出会ったのであるが、多喜二は深く同情し、14年(1925) 12月に島田正策からの借金と自分のボーナスを合わせ500円でタキを救い出し、大正11年8月に「区」から「市」になっていた小樽市若竹町の自宅に15年4月住まわせた。

美しい姉は小樽高女を出て佐藤家に嫁しており、母セキは息子に協力した。しかし考えるところがあったのか11月にタキは家出してしまった。

彼も小樽を脱出したかったのか、東京に出たかったのか、昭和2年(1927) 2月に大熊教授に東京での就職について依頼する手紙を出している。5月中旬上京藤原維人を訪問。4年2月には日本プロレタリア作家同盟中央委員となり、3月には代表作「蟹工船」が完成する。この4年5月失踪後2年ぶりで「彩子」と名を変えホテル勤めをしていたタキと会う。その2日後という16日付手紙から5月14日再会と考えられる。

11月には拓銀を退職し、5年(1930) 3月末に上京して4月に上京したタキと暮らして東京市外中野町に下宿。5月大阪での「戦旗」防衛資金問題などで検挙されたが6月に釈放された。しかしこれからが大変である。7月に不敬罪で起訴されてしまう。

不敬罪に問われたのは「蟹工船」の中で缶詰に「石ころでも入れておけ！」という表現のあったことに発しているという。8月には治安維持法違反で豊多摩刑務所に収監されてしまう。維持法は大正14年の公布だが昭和3年に改正されていた。いうまでもなく厳しくなっていたのである。翌6年(1931) 1月には保釈になったので、出獄を知って2月に下の妹と上京した田口タキに申し入れた結婚を受け入れられず断念することになる。彼女は顕著な存在になった多喜二に相応しくないと感じたのではないかと思う。

6年7月杉並町馬橋に母と弟と住む。そして10月日本共産党に入党した。11月初に奈良に志賀直哉を訪ね一泊した。満足の面会であったらしい。世は「満州事変」の中にあった7年3月地下運動に入る。地下活動を共にした伊藤ふじ子と4月に麻布区で結婚。ふじ子の母とも一緒に生活した。

絵を学び劇場に所属していた彼女は結婚した頃は銀座の図案社に勤めていた。その給料が生活費だったろうが、ふじ子が職場から検挙され多喜二は姿を消すことになる。1週間程で彼女は釈放されたが解雇される。ところがふじ子はその退職金を地下運動の彼に届けたという。いじらしい。

8月には「党生活者」が完成するなど創作活動は衰えず、麻布ヤマナカヤのフルーツパーラーで母・姉・弟と会ったり、12月日比谷公会堂でシケッテイコンサートを弟三吾と楽しむこともあったが、ひとときのことであった。昭和8年(1933) 1月「地区の人々」が完成『改造』3月号に載るが、実は2月20日赤坂で共青同三船留吉（実は築地署特高）と会いに飲食店に行き逮捕される。

拷問により午後7時45分死去する。21日夜死体は杉並馬橋の家に帰った。その遺体に「取りすがって泣いた女性」のことを澤田章子が平成15年(2003) 10月大館で講演している。まぎれもなくふじ子を意味するのであろう。母セキが息子を抱きしめて嘆いたことは周知の写真もあり、囲む同志の人々の写真もある。新聞も報道した。

だが22日に弔問した者や23日の告別式に集った者は検束されたといい、式に参列を許されたのは近親者と友人代表だけだったと「生誕100年記念小林多喜二展」の資料にある。志賀直哉は彼の死を知って、日記に「小林多喜二、二月二十日（余の誕生日）に捕へられて死す。警官に殺されたるらし、実に不愉快、一度きり会はぬが自分は小林よりよき印象をうけ好きなり。アンタンたる気持になる」と書いた。正しく一般の良識である。

母は昭和36年(1961) 5月数えで89歳で世を去る。小樽のシオン教会で入信しそこで葬儀は行われた。そして多喜二とふじ子の遺骨が、富士霊園にも納められている（澤地久枝『昭和史のおんな』）と知ったことを記してこの文を結ぶことにする。